

マタイ 7:24-29 「家と土台」

『そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行なう者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行なわない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった』 イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」

主イエスキリストはここで、終わりの日のことについて、語っておられます。終わりの日が来ると、土台があらわになる、ということであります。わたしたちの人生の土台と言うべきもの。わたしたちの生き方の土台と言うべきもの。わたしたちが何を根拠にして生きているのか。終わりの日が来ますと、その土台があらわになる、というのであります。

ここで主イエスは、二種類の生き方を提示しておられます。第一は、砂の上に家を建てる、という生き方であります。言うなれば、簡単なキリスト者、ということであります。

砂の上に家を建てる。これほど容易なことはありません。砂地に柱をさして、床をはって、壁をはって、屋根をふけば、もう出来上がりです。そこに何の苦労もありません。

簡単なキリスト者、というのは、砂の上に家を建てるのに似ております。キリスト者に求められるところの「外側」の要件をただ満たしさえすればよい、ということであります。

すなわち、信仰の告白をし、タバコを吸わず、酒を飲まず、日曜の礼拝にきちんと出席し、献金をおさめ、善行に励むことであります。

砂地にちゃんと柱はさしてあるのです。信仰の告白、という柱がそこへもうちゃんと立っております。床はきちんとはられております。タバコを吸わず、酒を飲まず、という床が出来上がっております。壁もちゃんとつくられております。日曜の礼拝に出席する、という壁が出来ております。屋根もふかれております。献金をおさめ、善行に励む、という屋根であります。

このように「外側」だけ見るなら、何も欠けたところがありません。ところが、ひとたび嵐が来て、川があふれますと、柱も床も壁も屋根も、みんな壊れて、流されてしまうのであります。

主イエスキリストが提示された第二の生き方、というものがございます。それは、岩の上に家を建てる、という生き方であります。これは、言うなれば、苦心するキリスト者、ということであります。

苦心というのは、何が苦心かといいますと、掘り返すことの苦心であります。いったい、岩の上に土台を建てるためには、岩のところまでずっと地面を掘り返さなければなりません。少し掘ります。しかし、岩は現れません。さらに掘ります。現れません。さらに深く掘ります。それでも岩は現れません。あきらめずに掘り続けます。だいぶ深く掘りますと、ようやく岩が現れてまいります。そうしてはじめて、岩の上に柱をすえることができるようになります。

この掘り返すということの苦勞と云ったら、ありません。わたしたちは、どれだけ掘り返さなければならぬのでしょうか。苦心するキリスト者であります。

今日のわたしたちの聖書の箇所、マタイによる福音書 7 章 24 節から 27 節は、主イエスが丘の上で大勢の群衆に説かれたところの説教、「山上の垂訓」と言われる説教のむすびをなしております。

この「山上の垂訓」という説教は、わたしたちの心の中を掘り返す言葉、わたしたちの心をえぐる言葉であります。

主イエスは、「腹を立てるな」と言われます。マタイ 5 章 21 節以下であります。

「腹を立てるな」と言われたとき、簡単なキリスト者というのは、簡単に受け止めます。しかし、苦心するキリスト者というのは、深刻に受け止めます。なぜならば、「腹を立てるな」と言われても、腹を立てずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。心の中に葛藤が生じます。「腹を立てるな」という主イエスの御言葉と、腹を立てずにはいられない自分の自我との間の戦いであります。戦っても、戦っても、なかなか勝利というものが、見えてまいりません。しかし、失望せず、忍耐深く、戦い続けます。これが、掘り返すということであります。

主イエスは、「情欲を抱いて見るな」と言われます。マタイ 5 章 27 節以下であります。「情欲を抱いて見るな」と言われたとき、簡単なキリスト者というのは、簡単に受け止めます。しかし、苦心するキリスト者というのは、深刻に受け止めます。なぜなら、「情欲を抱いて見るな」と言われても、見ずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。心の中に葛藤が生じます。

「情欲を抱いて見るな」という主イエスの御言葉と、見ずにはいられない自分の自我との間の戦いであります。戦っても、戦っても、なかなか勝利というものが、見えてまいりません。しかし、失望せず、忍耐深く、戦い続けます。これが、掘り返すということであります。

主イエスは、「離婚してはならない」と言われます。主イエスは、「誓ってはならない」と言われます。主イエスは、「復讐してはならない」と言われます。主イエスは、「敵を愛せよ」と言われます。簡単なキリスト者というのは、すべて簡単に受け止めます。しかし、苦心するキリスト者というのは、深刻に受け止めます。なぜなら、「離婚してはならない」と言われても、離婚したいと思わずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。「誓ってはならない」と言われても、他人に対して強い姿を見せずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。「復讐してはならない」と言われても、反撃し反抗せずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。「敵を愛せよ」と言われても、憎み呪わずにはいられない自我というものに、直面させられるからであります。心の中に葛藤が生じます。「離婚するな」

「誓うな」「復讐するな」「敵を愛せよ」という主イエスの御言葉と、自分の自我との間の戦いであります。戦っても、戦っても、なかなか勝利というものが、

見えてまいりません。しかし、失望せず、忍耐深く戦い続けます。これが、掘り返すということでもあります。

主イエスはさらに、「善行を人に見せびらかすな」と言われます。「隠れたところで祈れ」と言われます。「金銭に執着するな」と言われます。「思い悩むな」と言われます。「人を裁くな」と言われます。「あきらめずに求めよ」と言われます。「狭い門から入れ」と言われます。そういう主イエスの御言葉を聞くたびに、苦心するキリスト者というのは、葛藤を経験いたします。戦いを経験いたします。戦っても、戦っても、終わることのないように思える戦いを、経験いたします。これが掘り返すことでもあります。

いったいこの掘り返すということ。自分の自我と、主イエスの御言葉との間の葛藤、戦い、悔い改めということ、この掘り返すということがないのであれば、わたしたちは揺るがない岩にまで行き着くことが出来ません。

主イエスの御言葉と、自分の自我との間の終わりのないように見える戦い。この戦いに疲れ果てた時に、はじめてわたしたちは、ある転機に導かれることになります。自我を手放してキリストにのみ望みを置く、という転機であります。

それはこういう転機であります。すなわち、わたしたちは、自分に頼ることは全くできないのだ、ということ。自分の決心、自分の願望、自分の力、自分の努力というものが、まったくあてにできないものだ、ということ。自分に頼るということをまったくやめて、完全にただ主イエスキリストにのみ頼らなければならない、ということに気付かされる。そういう転機がやってまいります。

この転機に至ったときに、揺るがない岩であるところの主イエスキリストが、その復活の力をもって、わたしたちのうちに現れて下さいます。これがキリスト者の経験の第二の転機であります。

わたしたちは、自分の決心がまったくあてにならないのだ、ということを、本当に認めているでしょうか？ 自分の決心がまったくあてにならないのだ、ということは、千回の葛藤、千回の戦い、千回の敗北を味わうという、その苦心

の中においてこそ、経験せられるものであります。

さらにわたしたちは、自分の願望、自分の力、自分の努力というものが、まったくあてにできないものだ、ということを、本当に認めているのでしょうか？ 自分の願望、自分の力、自分の努力というものが、まったくあてにならないのだ、ということは、千回の葛藤、千回の戦い、千回の敗北を味わうという、その苦心の中においてこそ、経験せられるものであります。

自分の決心、自分の願望、自分の力、自分の努力に信頼を置いておきますと、やがて終わりの時に、風が吹き、川の水があふれて、全部流されてしまいます。自分の決心、自分の願望、自分の力、自分の努力が、すべて吹き飛ばされ、流されて、そこには何も残りません。

しかしわたしたちが、千回の葛藤、千回の戦い、千回の敗北を経験して、自分に対する望みをまったく捨てた時に、わたしたちは完全に主イエスキリストのみに信頼を置くようになります。もはや自分の決心に信頼を置きません。ただキリストに静かに信頼を置きます。もはや自分の願望に信頼を置きません。ただキリストに静かに信頼を置きます。もはや自分の力、自分の努力に信頼を置きません。ただキリストに静かに信頼を置きます。

わたしたちがただキリストに静かに信頼を置いているのであれば、終わりの時、風が吹き、川の水があふれても、わたしたちは微塵も揺らぐことはありません。なぜなら、わたしたちにはもう自分というものがなく、ただ揺るがない岩である主イエスキリストのみがいらっしゃるからです。

元気があった自分の栄光の日々が全部押し流されたとしても、わたしたちは微塵も揺らぐことはありません。そこに自分はなく、ただ揺るがない岩、キリストがおられるのみだからです。

自分の夢、自分の願望、自分の立場、自分のメンツ、自分の利益、自分の主張、そうしたものが全部押し流されたとしても、わたしたちは微塵も揺らぐことはありません。そこに自分はなく、ただ揺るがない岩、キリストがおられるのみ

だからです。

わたしたちがただ、揺るがない岩、主イエスキリストに完全に静かに望みを置くことができれば、どんなにすばらしいでしょうか！ しかしそのためには、掘り返すということ。この掘り返すということ。主イエスキリストの御言葉とわたしたちの自我との間の葛藤、戦い、悔い改めを通らなければなりません。どうかわたしたちが、いつでも主イエスの御言葉を正面から受け止めて、従おうとすることができますように。従おうとすることから当然起きて来るところの葛藤、戦い、悔い改めを、わたしたちは曖昧にせずに、そこを通って行くことができますように。そのようにして、わたしたちが、自分に対する望みを手放し、自分に信頼を置くことをやめ、ただ主イエスにのみ信頼を置くことができますように。

ジョージ・マクドナルドは「自我がわたしたちに与えられているのは、献げるためである」と申しました。ウィリアム・ジェイムズは「宗教とは、絶対依存の感情である」と申しました。パウロは「生きているのはもうわたしではない。キリストがわたしのうちに生きている」と申しました。

どうかわたしたちが、まことの岩なるキリスト、この岩の上にのみ、自分の存在のすべての根拠を置くことができますように。そうして、そのようにして得られるところの、まったき平安を味わうことができますように。お祈りいたしましょう。

祈り

天の父なる神さま。どうかわたしたちが、主イエスキリストのお言葉を右から左に聞き流して、簡単なキリスト者の生活をするのではなくて、どこまでも主イエス様の御言葉に聞き従おうとすることができますように。そのようにして起きて来るところのもろもろの葛藤、戦い、敗北、悔い改めの経験を、どうかわたしたちは「掘り返すこと」として、大切にしていけることができますように。そのようにして、どうかわたしたちが、自分というものをまったくキリストに

おゆだねして、自我というものをまったくキリストにおささげして、揺らぐことのないまことの岩である主イエスキリストの上に、主イエスの上にのみ、自分の全存在の根拠を置くことができますように。自分ではなくキリスト。自分の夢ではなくキリスト。自分の願望ではなくキリスト。自分の立場、自分のメンツ、自分の主張、自分の利益ではなくキリスト。ただキリストのみ、という地点まで、わたしたちが至ることができますように。そうするときに、たとえ自分の命がつきて終わるとも、たとえこの世界が焼かれて滅びようと、微塵も動くことのない絶対の平安を味わうことができますから、心から感謝いたします。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン